８月 10 日の山の日にちなみ、
山の本を集めてみました。
今年は新田次郎没後 40 周年でもあります。
本の中で山を楽しみませんか。

多摩市立図書館

（　）内は請求記号です

『アルピニズムと死』
山野井泰史著　山と溪谷（786.1）

『凍（とう）』の登山家山野井泰史。若い頃の事故、パートナーたちのこと、墜落と雪崩の経験、奥多摩でのクマの襲撃など、半生について綴られている。

『黒部の山賊』
伊藤正一著　山と溪谷社（786.1）

終戦後、山小屋の権利を購入したが、山小屋は山賊の住処との噂を聞く。登山者のふりをし山小屋を訪ねるが…。開拓者達の奇譚本。

『山怪（さんかい）－山人が語る不思議な話』
田中康弘著　山と溪谷社（388.1）

「阿仁マタギの山」「異界への扉」など、たった数十年前の山に住む人々が体験した不可思議な出来事についての採話集。

『鈴木みきのぐるぐる山想記』
鈴木みき著　交通新聞社（786.1）

イラストレーター鈴木みきが、山頂を目指すだけではない山の楽しみや、山と関連した事や物について、提案する。エッセイ集。

『青春を山に賭けて』
植村直己著　文芸春秋（786.1）

大学の山岳部を嫌々ながらも続けるうち、山の虜になっていく。無一文で日本を出て、世界初の世界五大陸最高峰制覇をするまでの記録。

『太陽のかけら』
大石明弘著　山と溪谷社（786.1）

登山界最高の名誉、仏ピオレドール賞を女性初で受賞した谷口けいの「自分らしく行い、人と出会い、世界を知り、楽しむこと」を目的とした生き方と生涯。

『新編・単独行』
加藤文太郎著　山と溪谷社（786.1）

1930年代、不撓不屈の精神と強靭な肉体で厳冬の北アルプスを駆け抜けた加藤文太郎の遺稿集。小説『単独行者』谷甲州著、『孤高の人』新田次郎著もどうぞ。

『富山県警レスキュー最前線』
富山県警察山岳警備隊　山と溪谷社　（786.18）

剱岳周辺で遭難救助や遭難防止の啓蒙活動を行う警備隊。過酷な訓練内容や、遭難者の救助活動、警備隊員の殉職事故等について隊員の手記が綴られている。

『バッグをザックに持ち替えて』
唯川恵著　光文社（F1 ユイ）

軽井沢に移住後、山男である夫と浅間山から始めた登山。富士山、ネパールへの旅行と続くエッセイ集。

『百年前の山を旅する』
服部文祥著　東京新聞出版部（786.1）

自然の中で山そのものと向かい合うために、百年前の記録や文献をもとに、当時と同じ装備・服装で同じルートを辿る、７編の紀行文。

『穂高小屋番レスキュー日記』
宮田八郎著　山と溪谷社（786.18）

山小屋で 30 年、穂高の「人が人を救う」精神で多くの人命救助に携わってきた著者の遺稿集。ヘリコプターによる救助活動の変遷も知れる。

『山小屋ガールの癒されない日々』
吉玉サキ著　平凡社（786.1）

北アルプスの山小屋の 10 年勤務した著者が見聞きした山小屋の裏側や人との繋がりなどのエピソードを綴る。

山に関する小説

『雨降る森の犬』 馳星周著　集英社 （F1 ハセ） 中学生の雨音は、立科に住む伯父と飼い犬ワルテルと暮らすこととなった。山岳カメラマンの伯父に連れられて山を知る中で、雨音は悩みながらも成長していく。	『栄光の岩壁』上下 新田次郎著　新潮社 （F1 ニツ） 岳人18歳の冬、八ヶ岳縦走をし、友人は凍死、自身も両足先を失う。だが、山への情熱は失われず、日本一の登山家を目指していく。	『帰れない山』 パオロ・コニェッティ著 関口英子訳　新潮社 （F2 コニ） 夏はアルプスの麓の別荘で過ごす僕は、羊飼いのブルーノと出会う。都会と田舎の少年の成長と友情の物語。	『神坐す山の物語』 浅田次郎著　双葉社 （F1 アサ） 「神上がりましし伯父」「兵隊宿」など、奥多摩の霊峰・御嶽山で語られてる怪異譚。同著書『あやしうらめし あな かなし』も、どうぞ。	『神々の山嶺』上下 夢枕獏著　集英社 （F1 ユメ） 深町は登山家マロリーのカメラを発見後、盗難にあう。一方、登山家羽生は前人未踏エヴェレスト南西壁冬季無酸素単独登頂を狙い続けていた。	『神去なあなあ日常』 三浦しをん著　徳間書店 （F1 ミウ） 横浜の高校生勇気が、卒業後に就職したのは三重県神去村での林業研修。自然の中で一生懸命生きる村民に触れ、少しずつ勇気は成長していく。
『銀嶺の人』上下 新田次郎著　新潮社 （F1 ニツ） 性格も職業も異なるが、山では唯一無二のパートナーと認め合っている登山家美佐子と淑子。世界初の女性同士ペアでマッターホルン北壁登頂を目指す。	『高熱隧道（ずいどう）』 吉村昭著　新潮社 （F1 ヨシ） 昭和11年、黒部第三発電所建設のための軌道トンネル工事は、160℃以上にもなる岩盤の中で人力での掘削工事であった。	『作家の山旅』 山と溪谷社（918.6） 小泉八雲『富士山（抄）』、幸田露伴『穂高岳』、田山花袋『山水小記（抄）』、河東碧梧桐『登山は冒険なり』など、明治から昭和までの文学者48人が残した山に関する作品集。	『沙羅沙羅（さらさら）越え』 風野真知雄著 KADOKAWA（F1カセ） 戦国武将富山城主の佐々成政（1539～88）は、浜松城にいる徳川家康に直談判すべく厳冬の北アルプス越えを決行する。	『淳子のてっぺん』 唯川恵著　幻冬舎 （F1 ユイ） 「女なんかに…」と言われ続けてきた淳子は、女性だけの隊で頂きを目指す。だが、女同士の嫉妬、軋轢、葛藤もあり、道のりは容易ではなかった。	『劒岳―点の記』 新田次郎著　文芸春秋 （F1 ニツ） 陸軍より劒岳山頂に三角点埋設の命令を受けた測量士柴崎の一行。信仰の対象であり、登山道もない劒岳登頂を地元の案内人と共に目指す。
『凍（とう）』 沢木耕太郎著　新潮社 （F1 サワ） 世界的登山家山野井泰史・妙子夫婦がヒマラヤ難峰ギャチュンカンへ挑んだ記録。下山途中、風雪や雪崩、自然の猛威に襲われる。	『灰色の北壁』 真保裕一著　講談社 （F1 シン） 登山家刈谷の奇跡の登頂記録写真について、合成ではないかとの疑惑が上がった。そんな中、刈谷が遭難死する。中編3編。	『八月の六日間』 北村薫著　KADOKAWA （F1 キタ） 日々に疲れていた「わたし」は、友人に誘われた登山をきっかけに、ひとりで山に向かうようになる。山は「わたし」の心を開いてくれる。	『春を背負って』 笹本稜平著　文藝春秋 （F1 ササ） 父の死後、亨は奥秩父の山小屋を継ぐこととなった。山小屋を訪れる人々は様々な事情を背負っていた。連作短編集。	『結ばれたロープ』 ロジェ・フリゾン＝ロッシュ著 石川美子訳　みすず書房 （F2 フリ） ある遭難事故後、モンブランの麓町では心身を病む者が増えた。だが、若者達は、山を愛し続けて困難を乗り越えていく。	『山女日記』 湊かなえ著　幻冬舎 （F1 ミナ） 主人公たちは様々な事情を抱えながら山を登る。登山を通して気持ちを確認する中で、悩みを抱えながらも前に進んでいこうとする連作短編集。